

# こぶし

第三号



上越こぶし山の会

# 目次

冬期の南八が岳	1
南葉山	5
戸隠西岳片尾根	10
五月連休登山	15
山行記録	20
山と私 (杉本敏夫)	21

# 山行報告 1974.1~5.

## 冬期の南八ヶ岳縦走

S49 1/13(日)~1/15(火)

メンバー 杉本 敏宏  
小倉 泰治

冬の八ヶ岳は北アルプスにくらべると、ラッセルの苦しさを味わうことなく歩みを進めたいごめを味わうことが出来る。そして三千メートルクラスの峰を一日で楽しむことができた。

1/13 高田(6.16) ↓ 直江津(6.40) ↓ 茅野(7.00)

↓ 赤魚川(7.55) ↓ 美濃戸口(8.05)

(8.55) ↓ 美濃戸口(9.05)

↓ 美濃戸口(12.40) ↓ 赤岳鉱泉(14.50) ↓ 赤岳鉱泉(16.50)

列車で約6時間ほどで中央線茅野駅に到着する。いそいでバスターミナルへ行く。農場線美濃戸口行きバスにのるが、みんな八ヶ岳に行く連中で満員だ。約1時間ほどで終点美濃戸口に到着、バスをおりると風が冷い、痛いように感じた。美濃戸口へ向うがおどろき道が氷っている。すべらないように注意をしながら行く。前山が美濃戸口を出発した時は最後のようなだったが、夕刻にほかの連中がゆっくり行く、美濃戸口に到着した時には

トツブクラスに入っていたようである。

山荘前で無料のろ茶を一杯飲み、つけ物が  
コチコチに氷付いている。美濃宇を少し行く  
と道は左・右に別れている。左は赤岳鉾衆へ  
右は行者小屋への道である。山此山此は左の  
道へ行くことにした。柳川北沢を高巻き道と  
行く。この付近から雪が多くトレースがは  
きりして、約一時間ほどで赤岳鉾衆に到  
着した。

今日はここですテントを張るが、秀之でもい  
なかつたテントを張り代一泊一人切戸なりで  
ある。

1/14

赤岳鉾衆(アサヒ) ↓ 行者小屋(アサヒ) ↓  
阿弥陀堂(アサヒ) ↓ 赤岳頂上(アサヒ) ↓  
阿弥陀堂(アサヒ) ↓ 赤岳頂上(アサヒ) ↓  
阿弥陀堂(アサヒ) ↓ 赤岳頂上(アサヒ) ↓  
阿弥陀堂(アサヒ) ↓ 赤岳頂上(アサヒ) ↓

朝、目を覚ましておどろい、小生のシニラフ  
とシユラフカバーが氷付いている。エアーマ  
ットもだ、朝食をすませて、テントをそのま  
まにしてサスナウ・ヒツケル・アイセンと

着け寝装で登る。中山東麓の急な斜面を  
仏と登りあはる。テラ・テラの下りで行者小屋  
へ出る。小屋から少し行くと地獄尾根道があ  
りもう少し行くと道はふたつに別れている。文  
三郎道で赤岳と宇岳の間に出る道で、もう  
ひとつは山此山此がこれから行く阿弥陀堂の  
道で宇岳と阿弥陀堂の間に出る道である。  
道はみんば夏道のうりのようだ。山此山此は  
途中で道をまちがえてしまい、気づいた時は  
かなり進んでいた。引き返そうと思つたが上  
の方を見ると人がいる、よしこのまま行こ  
うとなつた。尾根すたいにクンクン登って行  
くと目の前に三人のパーティがうろうろして  
いる。そこは岩場であつた。山此山此はこの  
岩を登る。杉本さんがさきに登つた。小生の  
登つたところにムーンマンが二本も打ち込ま  
れていた。このことを杉本さんに話すと、こん  
なところにムーンマンなんか打つところでない  
のにと笑つていたが、それにしては、あの  
三人が上つてこられた。岩を登出すに引きか之  
したと思つた。阿弥陀堂頂上に立つ、頂上

でタバコに火を着けようとして、あまり風  
 が強く吹のどなかなが火がつかない、スー  
 ーバミトンと手袋をとってやつとタバコに  
 火がついた、なんと一本のタバコにマッチ  
 棒をば本から一本、そっかう。その時に小  
 生のスーバミトンが風が飛さしてしまい、  
 杉本さんが取りに行く、ハイマツにひっか  
 かっていたとかである。阿弥陀岳を下り、  
 中岳を通り赤岳の登りは風が強く吹く、下  
 から上と風が吹エ、かなりエネルギーが消  
 耗して、ペースが落ちてしまう。赤岳最後  
 の登りは岩峰の洞に行く、赤岳頂上到着、赤  
 岳頂上小屋付近で休憩する。頂上小屋前でせ  
 性らしき者がサイルをまいて、わいわいの積  
 で休憩したやはりせ性であった、2人の話  
 しをだま、て聞くとハが岳の岩登りはつま  
 らないとか谷川岳の方がおもしろいとか言  
 っていた。さてわいわいは出発、みんなド  
 ンドン下りで調子にのって下る、赤岳を空  
 を通り、横岳の登りである、クサリ場を石  
 に左にと行く、1時間ほどで横岳頂上に着く

ここから小厨心、大厨心と上からの巻いて  
 みる、下の方に赤岳飯泉小屋の赤い屋根が  
 見える。ここから下りなのを調子よく行く  
 硫黄衣室でおそい昼食、パンがのどど喰ら  
 ない、赤岳の洞付近で杉本さんがシリセー  
 ドで少し下る、小生はトレースとの二のこ  
 と下る。途中でキジ打ち、ちようど終った  
 時に他のパーテイが通り小生の積を照て笑  
 って行くその後を追いかけるように下る。  
 飯泉のテント場にはわいわいと同じ仲間若  
 山のテントがいくつも目についた、わいわ  
 れのテントに到着、杉本さんは10分位前に  
 着いたとかである。食事の用意をしている  
 時にテント張り代とく小と来たので、さの  
 う松ったと追い返した。

1/15

赤岳飯泉(今) ↓ 飯泉産(今) ↓ 飯泉  
 産(今) ↓ 飯泉産(今) ↓ 飯泉産(今) ↓  
 飯泉産(今) ↓ 飯泉産(今) ↓ 飯泉産(今) ↓

下山の準備をすませて、さすていかす、  
 13(日)に柳川北沢を巻いて来たので今日は

北沢の河原を行く。こっちは方がらくである。また美濃戸の山荘前でお茶をのび、小生が瀬をあらいに行く。かみのけに水がついたところが白く氷ってしまふ。道は氷っているから、すべらないように注意をして行くが、ついにドスン！小生の尻がおもいきり地球にたたきつけられてしまふ。美濃戸口に到着すると、もうすでにバスにのる長い列が出来ていた。そしてわれわれの前でここまですと切られてしまふが、杉本さんが交渉してバスにのれるようになった。へ今回の山行で小生の体調が良かったから素晴らしい山行であつたと思ふ。

——記・小倉——

[MEMO]

山行記録

南葉山

S 49. 2. 10 ~ 11

メンバー

原 本 島  
杉 木

金子 中  
小 金 田

十日午後一時、先登五名の後を追うようにバスで尾根に降りた。天候は曇っているが、まじく曇ったところである。日印の赤旗の跡道をゆくと、地元の子供達がスキ―大会をやっていたが、そこまですぐと道がなくなってしまった。南葉へ登る道はここかと聞いてみたが知らないという。なおも二三人に聞いてみた所、少し手前の道を四五人で登った人達がいたという。どうやら承継きしてしまったらしい。先登早々あふなっかしい事で先が思いやられた。少し戻ると、なる程ワカンの跡があった。そこでワカンを履いてゆるやかな傾斜面を登り始めた。雪は湿った重い雪である。

三十分程したら天気かくずれて雪混りの強い風が吹いてきた。最初のうちはトレースもきれいに残っていたが、風当りの強い尾根に出ると殆んど消えてしまっていた。この辺の地形は皆目わからず、勿論霞も登った事がない、そこを順トレースのみを頼りに登ってゆこうと言うのである。おうず

うしいと言おうか、無敵砲と言おうか……  
そんな訳でトレースが消えているという事は  
非常な不安であった。不安ではあったが、  
かと言って帰ろうという気はなく、只後縁  
を歩いてゆけばなんとかなるだろう位の実  
に軽い気持ちであった。雪は結構深い。トレ  
ースも風の当らない所に僅かにそれらしき  
ものを残しているにすぎない。途中ミカン  
の皮などが落ちてゐるのを恐見、ここに  
休んだなとチヨツペリ安心感に浸り、又  
黙々と歩いた。相変わらずトレースはない。  
そのうち何か道を間違えたような不安な気  
持に襲われたので、少し戻ったところ脇の  
ブッシュの中に僅かにはあるがトレースが  
残っているではないか。「気がついて良か  
った」ホッとされた気持ちでその僅かばかり残  
ったトレースをたどって後縁を離れたが、  
それも周もなく風に吹き消されてしまつて  
いた。雪混りの風は強く、見通しはきかな  
い、どの方向に行つたのか見当がつかなく  
なつてしまった。そうなる不安感という

ものは雪がルマ表に増してくるもので、「  
オーイ」<sup>ト</sup>と大きな声を出して叫ん  
でみた。しかし、反応はなく、声はむなし  
く風に流されて、雪の中に消えてしまつて  
うであつた。

そうこう迷っているうちに「アッ」と言  
う間もなく雪庇から落ちてしまった。幸い  
たいした高さでもなかったので、雪まみれ  
になつた位で済んだのであるが、何か急に  
冬山の恐ろしさが胸に迫つてくるように感  
じられたのであつた。このまま帰つてしま  
おうか、そんな気持ちになりながら、更に「  
オーイ」<sup>ト</sup>と呼んでみた。すると小さな  
声ではあるが「オーイ」という返事が返つ  
てくるではないか。何かホッとされたもの  
を感じ、なおも声を掛けながら、声のする方  
に雪をかき分けていった。すると沢の向う  
に二人のスキーを履いて立っているのが見  
えた。おかしい、そう思つていると、その  
うち二人で話しているのが聞えた。「連れ  
戻したんじゃないか、そんな事を言つてい



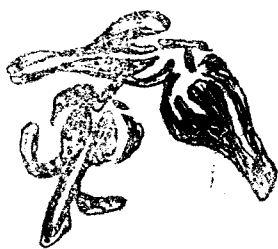
のである。遺囑とは縁起でもないとは思ひながら、半分は認めたくなるような心境であつた。とうやら二人はツァースキーをやっているらしい。登山者と思はれたか、という向には「思はなかつた」という答えであつた。国見平ほどの辺か」と聞くと「もつたし向つた」と言う。氣を取り直して一糸線に戻り、国見平まで行つてみることにした。

夜線に突つた時、ちよつと風が弱まり、団りの様子を知ることができた。国見平に向つて急根を歩いてみると、スキーをしていた二人の裏側の淡にテントが見えるではないか。大げさに言えば、助か、たという氣持であつた。ころほ落るようにテントまで下つた。テントに入って最初に出示してもう、た甘い紅茶の何とまかつた事……。夕刻、空はきれいに晴れて、南菜の方向に沈んだ夕陽が明日の天氣を約束してくれているかのようであつた。夜は遺囑の帯などに註の花が咲いた。晚

餐?の主演はヒレのおやじスラックニツカであろうか。いつもの帯ながら思う、どうしてふで食う飯は、飲む酒はかくもうまいのであろうかと……。

夜中の二時頃である。「おい起さろ、テントがつぶれているぞ」。そんな小倉さんの声に目が醒めた。最初は何の帯か、とっさの判断がつかひなかつた。夕刻のあの雲からは、僅か数時間でテントを押しつぶしてしまふ程の豪雪は思ひ難かほなかつたのである。テントを押しつぶす程の雪にもビックリしたが、他に感じ出した事も一つあつた。それは、テントがつぶれたという事実は知つたにもかかわらず、誰も起きる氣配を示さなかつたという事である(当人も念めて下はあるが……)。さすが山男、真に冷静にして沈着。そう評すが適当であらうか。しかし、つぶれたテントにゆう／＼と寝ていようとするとそのしぼとさ、氣力、今想ひ出して、実に滑稽な帯ではないか。結核入口に寝ていた桑原さんが外に出る人々になり、

積った雪を取り除いてくれたので、又その  
まは朝まで眠りにつく事が出来た。スミマ  
センホシタ。



朝起きてテントの周りに厚く積った雪を  
取り除き、朝食の後、南菜を目差して出発  
したのは八時半頃であつたろうか。雪には  
積れている筈々でもヒックリする程の雪の  
量である。深い雪と強い風にラッセルは  
かどらず、南菜の登頂は頂上目前下断念せ  
ざるならなかつた。雪を掘つての小休止の  
後、再び登つてきた道を下る事となつた。  
強風の巻トレースは完全に消えてしまひ、  
霧に登りと同じラッセルを強いられた奴で  
あるが、つい数刻前通つた所なのにと思つ  
と突に大からしくなつてくる。何という体  
力の浪費、何という時間の浪費であろう。  
見違しは悪く、コースの確認も容易ではな  
いようである。

ようやくテントに着くと、簡単な昼食を  
済ませた後、直ちにテントを撤去、出発し  
た。三時半。又きついらッセルが始まつた。  
灰塚までは相当の距離である。急ぐ我々の  
前に立ちはだかる深い雪は時間だけを遅め  
るかのようである。冬の夜は早く囲りはも

う暗い。眼下に広がる高田の街の灯りの、  
白い世界に美しく映える。

最初は何でもなかった。ラッセルが次第に  
意識になつてきた。黙々と歩く。八時頃や  
っと人衆のある所に出た。重い足と反響ま  
で運んだが、バスもタクシーも来ないとい  
う。何ということだ。もう遅いというのに、  
帰れるのだろうか？そんな不安が我が身に  
を襲つてくる。

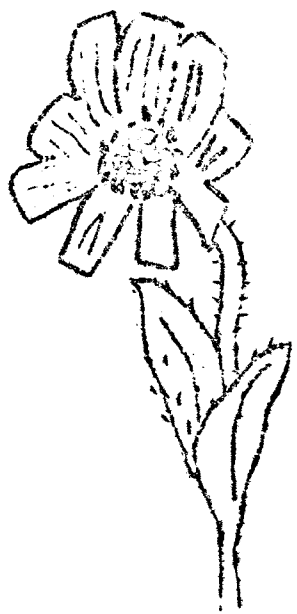
やむなく重い足を高田に向けてトボク  
と歩きたした時、吉本さんがドドケキリ  
と駈つて来たのである。汽笛の音もあり、  
小生と金子さんが死に察せられて高田駅  
に向つた。遅いよいなに駅ではちやうと違  
れた汽笛がはるところであつた。さ、そく  
そくに飛び降り、やっと駅についたのが十  
一時過ぎ、吉本さんと離れた汽笛に何れも  
／＼ 発射したらしい気持であつた。

ハフニンスの多い印象に残る山行であ  
た。

尚、ゴーストタイムを記録しなかつた為、

山行文としては、何か物足りなげなものにな  
つてしまつたが、これを小生の反省材料に  
今後の山行に臨みたいと思つていきます。

——田中 逸——



ウサギザク。

# 戸隠西岳 P1 尾根

1974年2月23日 24日

C.L.	杉原	本原	飯	免
S.L.	景	原	原	原
	木	島	西	多
	山	崎	尾	摩
	古	本	博	明

その昔、天照大神が天の岩戸に隠れてしまわれ、世の中が真暗になってしまいました。神々は相談しアマノウズメノミコトに舞をまかせました。外のさめきに天照大神は何事かと岩戸を少し開けてみました。この時を待っていた手力雄尊は、この開いた岩戸に手をかけるが早いから「エイ」とばかりに引き開き、岩戸を力いっぱい投げとばしてしまいました。こうして世の中は再び明るくなりました。

この時手力雄尊が投げとばした岩戸が遠くこの俣州までとんできてきたのが戸隠だといわれています。戸隠とはそういう意味で戸隠神社には手力雄尊が奉られている。戸隠は伝説の多い山です。

しかし戸隠の成因は、海老火山が隆起したものだといわれ、相当高い所から石化するといいます。岩質は、砂岩や礫岩が多く、岩登りには適していません。

西岳尾根は、戸隠山の南に連なる西岳連峰の主峰西岳へ登るルートです。登山道





幕野地(6.25) ↓ 倉・遊場下部(7.45) ↓ 岩壁  
 (9.15) ↓ ナイフリック(10.10) ↓ 遊場下  
 (10.10) ↓ ナイフリック(10.30) ↓ 幕野地(10.45)  
 幕野地(10.10) ↓ 新川渡(10.30) ↓ 上河川  
 (10.30) ↓ 宝光社(10.45) ↓ 温泉(10.45)  
 (10.45) ↓ 高田(20.00)

氷の霧が風に流れる。木々は樹氷で花が咲いたようだ。薄暗い中を歩きはじめる。

オオヒークでワカンをはずし、ゴメンがの枝にぶらさげた。オオヒークの登りが急だ。夏道は左へまいていられるらしい。直登。オオヒークを過ぎると尾根は広くなり、木の数が少なくなる。

ここから麓の遊場といわれるゆるやかな雪壁だ。雪は丁度良い異念にしまっている。約40mの登り。その上のツツシユをさけてバンドを右へトウパス。さらに雪壁を登る。急な急登がスガサガ。尾根がさしはじめる。マイレクト尾根。本院が目の前に見える。白い雪面から青い壁に突き出したタリカンバが美しい。急に高度感が増した。

約40m登ると再びバンド。上へ抜けるのは難かしいのを左にトウパス。前方に赤

旗がみえる。そこはヒークの跡だ。た。雪庇を乗り越すと、そこはワイルドな雪の松の木の打だ。クローブで入る。岩稜の上に出た。長棒の木の下で停止。陽が強くなり暑い。

ここから比較的ゆるい雪壁が続くが、しだいに急になりジャンクションにつくころには傾斜が急だ。ここから展望のより雪稜が長く。内々大雪庇が素晴らしい。

オールドし手前のロープからコルへは右の端から下るのだが、下がれず下りた。オールドで下る。降りてくれれば何のことはない。雪壁が通れる。

左の登りがオールドだ。ここはさほどたいたことはいない。向登はオールドだ。ナイフリックにはスガサガの雪がついてる。一歩で登食ということにした。

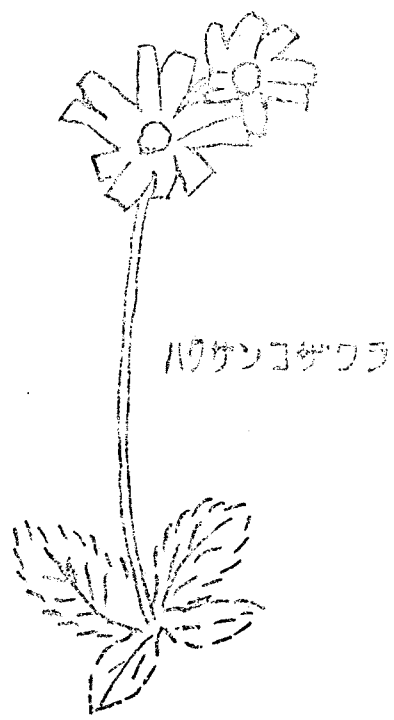
登食の間、栗原さんと二人でオールドを偵察。手前10m程キノコ雪が崩壊している。右下に降り、中央から二段になったテラスの上段に上る。ナイフリックは越せるかも

知らない。だが、その次の顔のついた岩稜が内題だ。大きな雪庇が覆いかぶさっているのだ。時間があれば切って登山したいこともないが、この先トレースがない竹を折ると他パーテイもここを引返しているようだ。我々もここを引返すことにした。

昼食を終って下山。天候はまあ良い。アイスはアイロを使う。後、ダイヤモンドもまではノーマイル。岳道の難にはアイロをかける。ゆがみのピッチでアイロを止めて、ここから岩稜中突る松の木までアイロがとれない。危険だがピッチにする。松の木からななめクロープで下ろうとするが下ま下とか不安定。しかたなくバツグ。岩稜をいにする。雪面に大きなキレが入っている。スツシユの中で確保、下りてきた着を次々本につかまらせる。すぐ下が登りにトウパーとしたバンドだ。その下が大雪壁。登る時より高度感もないし、傾斜感もない。空が曇ってきた。

サキセーフでワカンを取り返し、シリヤ

ドを楽しみながら天狗原のテントにもどった。下は夕雪が降ったらしい。紅茶をわかし、残りのパンを喰べ、テントを撤収。吉本君の雪洞はそのまま。入山のゆがくりしたパリスとはかわって快調にとほし、元気に下山。(杉本)





山行記録

# 五月連休登山

— 爺岳 — 鹿島槍ヶ岳 — 五竜岳 —

C.	L.	杉	本	敏	宏
S.	L.	小	倉	森	治
装	上	木	島	忠	彦
食	縁	松	槍	健	一
同	煙	八	ヶ	真	子
	同	清	岳	理	一
				精	

1974年5月1日～4日

山行をおわって

C.L. 杉本

五月連休登山は、昨年12月より始まる。鹿島槍ヶ岳の連続登山の山行でした。全体としては、技術的にも体力的にも弱きアンパランスなパーティでしたが、各人の努力とお互いの信頼、協力によって、ある程度克服され、成功させることができました。

今年は何年にも比べ、積雪が厚いと聞いていましたが、天候に恵まれ快適な山行でした。

爺岳は、奥道は種池に出してから登りますが、雪のついた急な尾根を直登しました。これは種池へのトラバースがいやだったことと、時間短縮のためです。しかし昼食時間がかかった為、同じになつてしまいました。今後考えなければなりません。

鹿島槍ヶ岳からキレットの間は、この時期でもいくらかの技術が必要でした。氷雪がクランプしておりアイゼンを使用しますが、用具に対する信頼を求められます。基礎知

敵・技術の取得に心がけましよう。

結局、キレットを越すのに手向わり・五  
巻へは登れませんでした。あの時点での  
疲労度からみて、無理せず帰營したのは、  
良かったと思えます。

翌日の五巻の下りは、もう前日と違い、  
アイゼンをつけての下りにも安定感が出て  
きました。

金巻無事下山できた事を喜んでいきます。

## 5 / 1

高田(16:10) ↓ 江津(16:40) ↓ 糸魚川  
(17:30) ↓ 所小谷(18:10) ↓ 大  
町(20:10) ↓ 扇沢(20:55) ↓ 読者(21:15)

メーデーの日はよく風が吹く。まだ陽の  
高いうちに出発。直江津に集結。危く凍る  
列車をまらちがえるところだった。

大町では、すでに陽も暮れ、真暗・タク  
シーをつかまえて来たんだ。ところが車は金  
中までしか行かないというのだ。仕方なく  
行く所まで行って、明朝6時に迎えに来て

もらうことにした。ところが何と運の悪い  
ことか。ゲートが閉まっているではないか。  
その上封向車まで。あーしよか。た。神さ  
ま。仏さま。天は奴に味方せり。

おかげで肩料道路を無料で走り、もうか  
った。扇沢の橋のたもとのコンクリートの  
上にテントを張った。十日月が明るくテン  
トを照らしていた。(杉本記)

## 5 / 2

扇沢(6:30) ↓ テレシロ場(8:45) ↓ 扇沢  
(10:30) ↓ 読者(16:55)

5月の連休を利用した登山登山から帰っ  
た次の日、朝から雨が降っていた。新緑が  
一層きれいだった。思えば、まはゆいばかりにそ  
の色合いを輝かしていた。下界にもこれ程  
奴々を魅了させる自然の情景があるものと  
改めて感じたのだ。あれ程恐ろしく肉体的精  
神的にも限界をつき、厳しく窮地に達し込  
まれ、無事に帰って来た喜びが強く感じる  
程だ。人間はいつてもなんでも無難え

る時はあるものと思つてゐる。

初めて参加したこの登山にこれ程恐しいものと思つた。たし、今現在ある人の話しては無いが今月中には再びあの地へは行ってみようと、これ程、ちも考えてゐない。

まあ天気は良かった。雲がどこにあるのやら探すのに一苦労する程だった。自分の頭ほどあるリッパの重たさに時たまフラツキがあり、雪上面での足の確保が不安で心配だった。初めて付けたアイセンの保全の信頼性がまだ充分ではなかった。

冷池小屋までの次の一日目は相変らずシンかりで終つた。節の後線を虫とところ左手側面に針の水、赤沢岳が、左手前方には駒立山の岳頂が目に入った。側面には大雪でこの小屋の屋根まで雪におおわれ、何となく物寂しい感じがした。陽の入が5時36分頃、剣の右下後線へ静かにゆっくりと消えていった。霧からのなだらかな後線が一瞬の内にかゆり、周囲の遠眺はただ冷た

い自然の造造物にすぎなくなった。また新しい今宵が始まり、氷がた訪れる新生な世界の創造ができるのだ。

黒部からの冷たい風が造作なく我々5人の丸くくるまわったシユラフの中までしりぞらせ縮みよ、ていた。明日の山行に鞆をはかませて(へ?)、静かに寝入ったのだ。た。星堂と丸町市街の光が山での恐怖心から少しでも和らげ、不安から解放させてくれた。

(松岡記)

### 5/3

冷池(冷池)↓布引岳(布引岳)↓赤沢岳(赤沢岳)↓モリト小屋(モリト小屋)↓

霧堂尾(霧堂尾)↓設営(設営)

今日も又一時向も寝すこしてしまふ。

明るい陽射しがテントの中に入りさわやかな目ざめ。外に出てみると、空気が冷たいけれどとても良い天気で、目の前には立山の山々がどびえて気持ちの良い朝でした。

朝食はお志るこ、即席漬、塩漬と簡単に済ませ、アイセンを付けて出発。この日は

私にとつて、とても苦しい一日でした。

一時間程で牽引索に着き、干しぶどうをつまんで、アイゼンをはずし度島嶽へ。度島嶽の頂上では白に黒の斑点のある雪鳥が2羽私達を迎えてへ？しくれました。私はこれからの苦しみを知らず、立山のすばらしい景観に見とれお分休けい。

のち、又アイゼンを付けて出発。ところが尾がすくんで出ない。キレットのくぼみまでの風影、歩いた道など全然覚えていないのです。脱履にあるのはただ、こわかったと言う事だけ。そして他の人達は何分もかからず登ってしまふ者を20分30分かけてサイルでや々と引張ってもらい、とうにか切り抜け、昼食を取りました。おびすんなりのとを通らず、仕方なく又とぼとぼ歩きはじめました。

バチ気味で口数も少なく、考える事へ？何も考える余裕ほどなく、ただ歩くのみ、時間の刻にあまり歩けず。今夜の清水氏との再会をのみらめ、途中風当りの少ない尾

根にテントを張り、おいしく夕食をいただき、おむりしました。この日もすつと妙高、火打、焼が美しく見えておりました。

今、又時が流れたかと思つたのでしよう、雪のある山に行きたくになりました。

(ハル記)

#### 5/4

昨夜食事後に、明日の起床は4時と決めて、みんなそれぞれシユラフに入る。

オレのとほりにいた彼女が、いま何時だとスレを起す。時計の見まちがい、みんなを約一時間へ3時15分)に起してしまい、それでも誰ひとりともまたぬる者がいない。みんなシユラフをかたづけ、少し早い朝飯の仕事にかかる。昨夜のうちに水やヤサイなどを作っておいたのですぐに出発。今日の朝は雑煮だ。杉本氏は毛子を8コも

食べたとかで、オレはどうしたのかモ子之  
コである。なんか胃の調子が良くないから  
だろう。今日はバテルか？、そんな気が  
する。

出発の用意をして、さて出発。今日は天  
気が良い。みんな調子が良さそうだ。オレ  
は何だか足が前に伸びない。後からノコノコ  
行くことにした。五竜の登りでやっと自分  
らしく調子が出る。急斜面をカンスン高度  
を上げ五竜岳頂上。今年で又同日、五竜岳  
頂上に立つことが出来て良かった。一月に  
はひとかたが今回はすばらしい天気であ  
る。頂上に犬が上っていたのはおどろきで  
ある。記念写真を撮り、マイゼンをつけて  
五竜を下る。一月と肩ビルトなのでオレ  
にはお歌が出る。

五竜山荘で清水君と合流。山荘へ入って  
みると、ちやうど彼がおい出される場所  
であった。彼は八方尾根から唐松岳をして  
五竜山荘のコースであり、計画では与言(山)  
五竜山荘で合流の予定であったが、オレは

ちが思っていたより時間がかかったことで  
ある。そして今日合流となった。山荘前で  
休憩をしている時にオレは山荘前の斜面で  
クリセードを乗しお、登って来るのが大変  
なので二度でやめた。

これから遠尾尾根に行く。白岳をトラバ  
ス。みんな自分の好きなこととして下る。  
遠尾も一度来たからあまりおもしろくない。  
天気だからのんびりと歩く。小遠尾山の少  
し手前で鹿岳とカクシ里がバツスンのと  
ころで少し早い昼食を取り、オレは朝と同  
じに食べる物がのどを遠らす。松岡君がは  
だかになつて撮影をしていたようである。

神威のスキー場に入ると大変である。リ  
フトもゴンドラも動いていない残念だ。歩  
いて下るが思っていたよりも急斜面なのでびっ  
くり、ここを登ってきたら本当に大変だ。下  
りで良かった。男は二人は飛はして下って  
行くが、オレと彼女は後からゆっくりと下  
る。スキー場の下の大堂でビールでカンパ  
イ、ビールがうまい。みんなの顔をみると

前か後かわからない程真意だ。この場で  
明日金子さんのところへ行くのかと思うと  
打かしくなる。神城の駅に向う、みんな無  
事に下山出来て本堂に良かった、4日向天  
気で、暑い時や楽しい時もあり、おもし  
ろい山行であった。  
(小倉記)

(MEMO)

このページには、昭和十一年から五月  
までの山行記録がすべて記入される  
予定でしたが、そのための原稿が、  
び 集まらないのを取止めることにしま  
した。次号にはのせるつもりですの  
で、よろしくお祈りいたします。  
わ つきましては、念費各回の山行記録  
お を急ぎ出して下さいますかお願  
いたします。

(編集者)

# 山と私

杉本敏彦

私が始めて山に登ったのは、確か中学2年の夏休みだ。たと思ふ。私がかよっていた城北中学では、当時夏休みになると一年生は海水浴、二・三年生はキャンパスといふことがやられていた。私はこの学期が準備してくれた借物——登山用キャンパス、火打登山をする——に参加したわけだ。

私は、中学時代吹奏楽部に入っていたので、それまで山に行く機会は何となくなかった。しかし、二年上の従兄が生物部で蝶の採集に熱中して、その影響もあって私の家のあかひにあるカラタチの垣根から、アトハチヨウの卵や幼虫をつかまえてきて飼育するのが好きだった。そんなわけで私は、この始めたの山行に何人かの仲間と共に、

捕虫網と三角紙をもって行。たのを覚えてい

る。  
今ならせう峰キャンパス場までバスが入っているし、自家用車ならもっと簡単に行ける。しかし当時の私達は、田口駅から荷物だけをトラックで運び歩いていった。中学生にとっ

てはそれは長い苦しい道のりだったろうが、今はもう憶えていない。  
杉の沢部落をぬけるとあとはもう家は一ケンもなく、当時はまだ国除スキー場もなかった。五八平の近辺は、ユキツバキが大群落となし、根曲り竹がなっしり生えた雄大な斜面だった。妙高の自然そのものが息づいていた。国除スキー場はその面影を一掃してしまった。せう峰は今もキャンパス場と牧場が別になっているが、当時は牧場の空にテントを張った。朝になるとテントの外に虫が出て、たキエーリだとか、トマトだとか人參がなくなっている。大きなわきになる。牛や馬が早くきて食草を食べていったのだ。それでも私達は人な、こく並奇、てくる牛たちを可愛がったものだ。女

の子などはおもしろい手をかして融けたりしていった。笹ヶ峰牧場はそんな牧歌的なところだった。

笹ヶ峰牧場でキャンピングすると、翌朝早く火打へむかうことになる。まだ朝もやのちかめる牧場をでると、道は雑木林をぬけ、やがて巨大なブナの林に入る。大人二人でも手ごととどかないような巨木がうつうつと立っていたものだ。積重なった落葉の上をサツサツと音をたてて歩いていると、木々の間を通して乳白色の霧に太陽がさしこみ、レンフラントの窓のような情景が私達を包みこむ。

そうした黒沢までの道程も今はもう昔のものとなってしまう。あの巨大なブナの林は切りたおされ、やわらかい朝陽の光りに乾いた太陽が頭から照りつけ、落葉のしきつめられた登山道は砕石の自動車道にかわってしまった。あの雄大な自然はどこへ行、ってしまったのだらう。自然は一度破壊されると再びもとにもどることはできない。容易な崩落が崩れもたらすか、笹ヶ峰一帯の変化は、私達

にこのことを無言で向いかけているようだ。私の始めての山行は、まだほとんど荒さのていなかだった。妙高火打の自然に身も心も投げ込んでしまふ、そんな感じのものだった。

私が山に足繁く通うようになったのは、高田高校に入学し生物部に入ってからのことだ。生物部では、毎年夏休みになると観察と採集を目的として山行を行っていた。

一年生の時は白馬岳へ行った。豊高は高山植物と高山蝶は大きな魅力だった。当時の高々には高橋、河原という二人の生物部の主さんがおられ、顧問として同行された。

白馬岳は現在、特別保護地域に指定されているので、いっさいの動植物、岩石は採集が禁止されている。当時もすでに植物、岩石の採集はできなかつたが、昆虫類の選中が捕虫網を持っていても別にとがめられはしなかつたし、お花畑で自由に写真をとることもできた。



私は、この山行で始めてキマラバンシュー  
スなるものを見つけた。登った。雪溪の工を  
歩くのも始めてだ。だが、別にこわいとも何  
とも感じなかった。ただとけた雪が靉にし  
み足が冷たくなるのはこまった。

ネスカピウのお花畑は、最初の高山植物と  
の対面だった。ここで私達は世にもめずらし  
い八重咲きのシナノキンバイをみつけた。先  
生や先輩と芝に私も写物のカメラのシャッタ  
ーを切った。後年白馬登山の際には必ずこの  
近辺を採すのだがいつもみつからない。

始めて見た高山植物は、名まえがほとんど  
わからず、何度も何度も二人の先生に聞いた  
ものだ。二人の先生は、そんな私達一年生に  
いやがりもせず親切に、何度も何度も教えて  
くたさった。そんなわけを下山までには、ハ  
クサンフーロだとか、シナノキンバイ、ハク  
サンイチケ、クロエリ、ワルマユリなど、無  
数に花をつけているものの名前だけは憶える  
ことができた。

生物部で蝶の採集をやっていた私は、よく  
妙高々原に通ったものだ。田口駅へ現妙高々  
原駅へで下車し、妙高温泉を通りぬけると、  
妙高中学の横に出でくる。ここは現在国道が  
通り交通が激しくなっているが、当時はまだ  
工事が始まったばかりで静かなところだった。  
その静かな中に、さらに静かな星野公園が私  
を待っていてくれる。ここは、ただ静かな公  
園というだけでなく、ヒメシロコウ、ミヤ  
マシジミ、カラアシジミなど蝶類も多く、私  
の大変好きな所だった。芝生に膝をおろし  
て休んでいるとミヤマカラアスアケハなどが確  
然と飛んできたりして、あわててそれを追っ  
かけたものだ。

ここから一本松スキー場にかけてが、私の  
蝶採集のホームグラウンドだった。道路は石こ  
ろだらけのデコボコ道で、時々通る車が白い  
土まじりの舞いあけていた。この道路沿い  
は、おっとミズナラヤコナラ、カシワ、ハン  
ノキなどの雑木林で、その上をセフイルス（  
そよ風）と呼ばれるミドリシジミの仲間が、

太陽に超えてキラキラ輝かせながら、いそがしく飛びまわっていた。

一本松スキー場は、当時蝶を採集するものにとっては、一日いてもあまざないところだった。ススキなどの単子葉植物の周からは、キンイチョモンジセセリ、アカセセリ、スジタロキヤバネセセリなどのセセリ類、それにシヤノメチヨウの仲間が多く飛び出してきたし、ワレモコウの花の近くにはゴマシジミが、そしてクララには時々スズルリシジミが訪れ、私を興奮させた。また、ミドリヒョウモン、メススロヒョウモンなどのヒョウモン類も多く、暑い陽ざしの下と汗まみれになつてかきまわつたものだ。

私がここに通い始めた頃、道路脇の土地は、山栗という不動産会社が買収をはじめ、立札が打ちはじめた。丁度、高度経済成長政策にのつて、自然破壊の別荘地開発や観光開発が始まるうとしていた時期だった。買収された土地は、雑木林が切られ、草原はフルドーナツで惹かれ、今は立派なホテルなどが

が建ち、私の友人であった蝶類の姿は数少ないなつてしまった。

妙高高原にはまだ自然が残されているという人がいるが、自然の中で最も弱い存在の小動物、昆虫類が激減している状態では、決して自然が残されているとはいえないだろう。妙高有料道路は、こうした自然破壊をさらにおしすすめるものとして私には賛成できないのだ。

高校時代の夏の山行は、回数そのものは少なかったし、荷物も登山部の連中に買わない位かっいでいた。しかし私の山行はあくまで植物や昆虫を採集することが目的であつた。山はそのために登つたのである。

だが、そうした山行の中で、山そのものに對するあこがれ、自然そのものに目とあはれる態度がつかぬ水でいったのだと思う。

山登りそのものを楽しむ心ができてきたのだ。  
——次号につづく——

集記  
編後

書いてある文章は、冬山から春山と積層期の山行のことなのだ。象の外は真夏の太陽がサリンチンと照りつけ、産の木々ではアムラむみが熱い声をたてています。なんとという牙痛、あ？ー熱いー

みんな夏山で、檢ヶ岳に集席しているといふのに、係叔に私だけが、一人暑さとうだて、がり切りをせにやならぬいのめ。ちぎしよう。俺も早く山へ行きたい。そんな切ない気持ちで書いたためか、字があっちをむいたり、こっちをむいたり、又変換みにくくなってしまうました。しかしかマシカマン。

記録だけのものになってしまいました。ドシム(原稿を投序入山して下さい。(杉下丸)

こぶし (※3巻)

1974年9月1日 発行  
発行 上越こぶし山の会  
印刷  
編集 全風 西木博明

▲上越こぶし山の会 新潟県上越市豊本町5の1の39  
TEL. 0255(24) 3927(杉下丸)

不許複製・禁転載



JKAC